

予防接種について

予防接種により乳幼児期の病気の発症や重症化を防ぐことができます。

小さく生まれたお子さんは感染すると重症化しやすいため、お子さんを病気から守るためにも予防接種をお勧めしています。

接種時期は、小さく生まれたお子さんでも暦年齢（出生日からの月齢）に基づいて進めていきます。

予防接種は個人を病気から守るだけでなく、多くの方が接種することによって、社会全体をワクチンで予防できる病気から守ることができる利点もあります。

予防接種の実施方法・日程は市町村保健師、または、主治医にご相談ください。

【予防接種で特に注意が必要なお子さん】

下記に該当する場合は、主治医と相談し接種時期・方法を決めましょう。

- ・重篤な急性・慢性疾患にかかっている場合
- ・これから接種しようとするワクチンまたはその成分で重篤なアレルギーを起こしたことがある場合
- ・3か月以内に輸血、またはγグロブリン製剤（大量γグロブリン製剤の場合は6か月以内）を投与した場合（接種を回避する期間は、体調・治療内容・ワクチンの種類（※）により異なります。主治医に確認してください）
- ※BCGやロタウイルスワクチンを除いた生ワクチン（麻疹風疹混合、麻疹、風疹、水痘、おたふく）
- ・けいれん発作のある（あった）お子さん
- ・手術・麻酔などの予定があるお子さん（ワクチンの種類や各施設によって基準が異なります）
- ・免疫不全、悪性腫瘍等の基礎疾患
- ・副腎皮質ステロイド剤、免疫抑制剤を内服している場合 など

【同時接種について】

2種類以上のワクチンを1回の通院で接種することを同時接種といいます。

ワクチンの効果は単独で接種したときと変わりません。また、それぞれのワクチンの副反応などの頻度が上がることはありません。（日本小児科学会の予防接種の同時接種に対する考え方）

【予防接種の副反応について】

予防接種は100%安全であるという保障はできません。局所的な腫れや熱感、発熱等、さらに極めてまれですが重篤なアレルギー（呼吸困難や血圧低下等）やその他の重い副反応を起こす可能性があります。しかし、予防接種による合併症の予防効果と副反応による合併症のリスクを比較すると、予防接種を行うことにメリットがあるため、予防接種をお勧めしております。

○接種後の注意点

- ・予防接種後しばらくは（15～30分）接種した医療機関に留まり、体調の変化がないか確認する
- ・気になる症状が出現したら、接種した医療機関に早めに相談する

【RSウイルスについて】

RSウイルスは、乳幼児の呼吸器感染症の重要な原因ウイルスで、細気管支炎や肺炎を起こします。中でも、早産児や生まれつき呼吸や心臓に病気をもっている赤ちゃん等が感染すると、重症化する場合があるので「シナジス」の予防接種をお勧めします。

【シナジスについて】

「シナジス」はRSウイルスに対する免疫＝“抗体”の注射薬です。RSウイルス感染症を完全に予防することはできませんが、重症化を防ぐことが期待できます。注射の効果は約1か月間なので、ウイルスの流行期間中、月1回の注射を継続します。

接種の開始時期や投与回数は、RSウイルス感染症の流行状況、生まれ月や疾患により異なりますので、主治医にご相談ください。

○投与の対象者（保険適応）

- ・ 在胎週数が28週以下で、生後12か月以下の乳児
- ・ 在胎週数が29週～35週で、生後6か月以下の乳児
- ・ 過去6か月以内に気管支肺異形成症の治療を受けたことがある、生後24か月以下の乳幼児
- ・ 生後24か月以下の血行動態に異常のある先天性心疾患の乳幼児
- ・ 生後24か月以下の免疫不全を伴う乳幼児
- ・ 生後24か月以下のダウン症候群の乳幼児

【インフルエンザについて】

1歳以降、インフルエンザの予防接種を積極的にお勧めしています。生後6か月から1歳までの間でもインフルエンザ予防接種は受けられますが、予防接種の効果が少ない可能性があります。

お子さんが接種しない場合でも、同居しているご家族が接種を行うことでインフルエンザの感染予防効果が高まります。

接種回数：13歳未満：毎年シーズンに2回接種

13歳以上：毎年シーズンに1回接種（2回接種も可能）

予防効果：予防効果は接種後約2週間後から約5か月間継続

生後6か月～13歳未満ではA型インフルエンザの約60%、B型インフルエンザの約40%の予防ができ、子どもの入院をA型インフルエンザで約50%、B型インフルエンザで約30%減らすとされています。

注 意 点：卵アレルギーのある（疑われる）場合は、主治医にご相談ください。